

南北朝時代の東上総

元寇と鎌倉幕府の没落 承久の乱(一二二一年)に鎌倉軍が勝利をおさめてから、朝廷の勢力はまったく地におちてしまった。幕府は従来の京都守護を六波羅探題にあらためて朝廷の監視を厳重にし、ついには皇位の継承まで左右するようになっていった。

ちょうどこの頃、海のかなた大陸では遊牧の民、蒙古族から成吉思汗(チンギスハン)が立って、アジアからヨーロッパにまたがる広大な地域を征服し、世界史上最大の帝国を樹立していた。そして、その子忽必烈(フビライ)は国号を「大元」と称し、わが国をも征服下におかんと、高麗を通してしばしば使者を派遣してきたが、連署北条時宗(のち間もなく執権となる)は断固としてこれを拒否した。元は高麗に根拠地を設営して文永十一年(一二七四年)十月、大



玉前神社

の主なる神社に、敵国降伏の祈願をこめることに専心した。下総の香取神宮に奉納された本地仏、釈迦・薬師・十一面観音・地藏等の光背銅板(懸仏)に刻された銘文の一節に、

「右の志は天長地久、当社繁昌、異国降伏の爲めの心願成就し造立する件くだんの如し。弘安五年八月一日」

とあるのは、正にこの時の祈願の一証左である。上総一宮、玉前神社にあって、同じく盛大に執行されたことと思われる。

ためにわが国では、この大勝を天佑神助とし、国を挙げての祈禱や祈願がもたらした「神風」のおかげと信じこみ、その余韻は過ぐる太平洋戦争まで、颯々として尾を引いていたのである。

しかしながら、この戦争がその後の日本にあたえた影響は、甚大であった。はじめて経験した大陸の異民族との戦闘は、これまで夢

挙して北九州に侵略し来たった。かねてこのことあるを予期して、鎮西の防備をかためていたものの、朝野の驚愕は言語に絶するところがあった。しかし若冠二十四歳の執権時宗は、九州在住の御家人はじめ公家を総動員して、徹底的にこれを撃退した。この時、外敵を防いで大いに苦しめた武将のなかに、下総の千葉頼胤と上総の深堀時仲がある。頼胤は常胤六世の孫で肥前国小城郡を、また時仲は夷隅郡深堀(今の中原町)の住人で同国彼杵郡を、それぞれ知行した地頭であった。『北肥戦志』に、

「右大将(頼朝のこと)の時、千葉介常胤は鎮西の監職にて関東の所領の上、肥前国の小城郡晴気保を賜はりしより子孫代々当郡の地頭となりぬ。常胤六代の孫頼胤去ぬる文永年中、蒙古武備として当国へ下てありけるが同十一年の冬蒙古と打戦い疵を被り、其の手不癒して翌年三十七歳にて失せぬ」

と見えている。この大戦に、上総・下総の精兵も九州男子と伍して活躍、おおいに蒙古軍の心胆を寒からしめたわけである。

越えて弘安四年(一二八一年)閏七月、こんどは艦船三千五百、兵十万をもって再度、来寇して来た。幸いにも、時あたかも台風シーズンにあたって夜半から大暴風雨となり、蒙古軍は艦船衝突、あるいは沈没溺死の大修羅場下に全滅の悲運をこうむった。生きて帰るもの僅かに三人、という俗説までうまれていくほどの惨敗を喫したのである。

これに先だち、龜山天皇は身をもって国難に代ることを神明に誓い、大社大寺に戦勝を祈禱せしめた。また幕府も、関東はじめ諸国

想だにしなければならなかった大きなスケールであった。

まず驚ろいたのは毒矢そのほか、敵の兵器のすぐれていたこと、それと身がるな軽武装の兵団にたいして鎧兜で身をかためた重装備が、あまり役にたたなかったことを知った。殊に敵が火器を使ったことには、さすがの勇猛果敢な鎌倉武士も胆をつぶし、戦意すぶる動揺したのである。

従来の戦闘は、荘園の領有をめぐっての争奪戦であったから、武将同士の騎馬戦によって勝敗が決したのである。江戸時代の故実学者であった大名、白河楽翁(松平定信)の書いた『花月草紙』の中に、この時代の戦いについてよく考証されている。それによれば、戦いの第一義は名を惜しんで蓄たくわを後世に伝えることにあるから、出あいがいらず先ず遠い祖先以来の家柄や榮譽をならべたて、相手にこれに答えてやおら自分の家系や手柄を敗けず劣らじと名乗りあい、さて馬上より決闘に及んだのである。

源平時代にできた『今昔物語』にも、大将同士が力闘の間は軍勢手出しすることなく、鳴りをしずめて見守るさまが描写されている。自分の大将が命がけでたたかっているのに、かたずをのんで見物するというのだから、今日からみたら一種のスポーツとしか考えられない。

元寇の役後、国内戦闘もこれを契機として、次第に一騎打ちの形がうすらぎ集団戦法へと、軍陣作法も脱皮していった。したがって居城も、騎馬戦に発達した平地の館やかた式から、だんだん要害堅固の山城あるいは築城へと変貌していくのである。既に述べたとおり、広

常の居城として一宮高藤城跡を否定する所以も、ここにあるわけである。

つぎに、戦後の処理困難と御家人の窮乏が、社会に深刻な影響をあたえるようになったことが挙げられよう。国難来たるに備えて、幕府直属の御家人以外からあつめた兵員や物資（武器や兵糧など）に対する荘園本所の不満、蒙古軍撃退の勲功に対しての恩賞の棚上げ等は、幕府の信用を下げるにおびたらしいものがあつた。しかも、引きつづいて異国来襲にそなえて補強、また警固しなければならぬ北九州の防塁その他の出費など、幕府を苦しめ武士の負担を重くする材料は山積するばかりであつた。

徳政令の施行 こうしたさなかにあつて、更に御家人の窮乏に追いつちをかけたのは、この時代の武家慣行であつた妻子への財産分割譲与と支配階級としての生活費増大であつた。すなわち、財産の細分と驕奢な生活によって、御家人の経済的困難は頂点に達した。これがため、御家人の中には所領の一部を売却するものや、質入れるものが多くなり、はなはだしきは主要財産である土地を、悉皆手ばなすものさえ現われるにいたつた。

もはや武士の面目を保持するどころの騒ぎではなく、このままに放置すれば、おりから軌道に乗ってきた貨幣経済の前に、天下の御家人は枕をならべて皆討死しなければならぬ、という最悪の事態に追いこまれたのである。

このために、幕府のとらざるを得なかつた政策が徳政令であつて、これは武士の救済もさることながら、棄てておけば御家人とそ

しかも同じ月の下旬には、少貳・大友・島津の連合軍が鎮西探題をおそい、これを打ちたおした。

「六十余州悉符ヲ合タル如ク、軍起ツテ」と『太平記』にあるが、まことにそのとおり、全国的機運によって幕府はたおされ、文字どおり百五十年間の幕を閉じたのである。

ために、隠岐国に流された後醍醐天皇は、元弘三年六月京都に還幸して政権の座に復した。これより建武二年（一三三五年）十月、尊氏叛逆までの二年半足らずの政権を建武中興と呼んでいる。

北朝と房総 足利氏は下野国足利庄を本拠とする源家の名門で、幕府生えぬきの御家人として重きをなしていた。上総・三河の守護職のほか、丹波・美作その他に所領をもち、とくに三河に勢力を扶植したため、その地に支族おおいに繁殖した。

嫡流の尊氏は、かねてから北条氏にとって代ろうとの野望をもつていたが、おりしも後醍醐天皇の親政が緒についたばかりの建武二年、北条高時の遺子時行が信濃に兵を挙げて鎌倉に入ったのをこれ幸いと撃滅し、鎌倉を拠点として叛旗をひるがえした。そして、奸臣新田義貞を追討するとの名目のもとに兵をあつめ、天皇方の諸軍をやぶって持明院統の豊仁親王を光明天皇と称号して即位させ、おのれは京都に幕府を開設することとしたのである。世にいう室町幕府ここにはじまり、尊氏の子孫が將軍をつぐこと十五代、二世紀半にわたつてつづく。

さて、後醍醐天皇は比叡山に難を避け、次いで吉野に潜幸して行宮に入った。世にこれを南朝といい、前者を北朝と呼んでいる。

の所領を基盤として成り立つ幕府の存続を危うくするからである。

その要点を一口で言えば、御家人の所領は何十年前に売り、または質入れたものでも無償で取りかえすことができる、これを不服として文句をつけるようなことがあれば、その者は罪科に処するといふのである。

おまけに、訴訟をおこしても敗訴の再審を許さないとか、質入地の利息や借金についての訴訟もまったく受けつけないという、徹底した御家人保護のモラトリアムであつた。

それでも、武士の生活が楽になるというわけでもないこととて、徳政に関係ない旨の誓約を入れたり、売買と譲与との二重証文を作つたりして、その裏をくぐって苦境を切り抜けるものが多かつた。

しかし一面、御家人自身も妻子への分割譲与の弊に悩んだあげく、領地保持の方向に進むようになった。嫡子以外のものに対しては一期分、すなわち一代かぎりの制限をつけ、その死後は自動的に本家（嫡子）に帰属するしかけとするなど、だんだん単独相続制へと移行するにいたつた。

もっとも、この徳政令の実施は経済界をみだして幕府の不信をかめるだけで、すこしも実際の効果はあがらなかつた。そして北条氏の専横と幕政にいたく強い不満は、やがて朝廷勢力の討幕運動に結びついて、正中元年（一三二四年）と元弘元年（一三三一年）両度の交となり、一度は敗れたが元弘三年五月、有力な東国御家人の足利高氏（のち天皇名の尊治より拝領して尊氏と改む）が六波羅探題をおとし、新田義貞が鎌倉に攻め入つて北条一族を滅ぼしてしまつた。

これより明徳三年（一三九二年）の両朝合体、後龜山天皇の京都還幸までの半世紀余、五十七年間にわたつて、わが国は二つの朝廷と二つの年号のもとに相争い、所在の武門は自己の利害とからみ合せて何れかに味方し、天下は内乱に明け、また内乱に暮れるというありさまが続けられた。

太平洋戦争前の皇国史学はなやかなりし頃は、南朝方を勤王正義とし、北朝方を逆臣非道と割切つて説明されたが、本質は決して、しかく単純なものではない。

さてここで、この時代の東上総について少しくふりかえてみよう。

尊氏は、時行を滅ぼして鎌倉に入るや、まず上総国佐坪・市野々（いずれも現長南町）および武蔵国佐々目郷（現埼玉県北足立郡笹目）を鶴岡八幡宮に奉獻した。また上総・下総の新田義貞所領地を没収の上、勲功あつた将士に分ち与え、ぬけめなく人心を収攬している。

このとき房総の名族千葉氏は二派にわかれ、貞胤は義貞に味方して尊氏の軍と相模・伊豆・近江の諸国に戦つた。貞胤はこれより先、元弘二年（一三三二年）三月京都にあって、後醍醐天皇の隠岐国遷幸に兵をひきいて警固、これを護送している。

『千葉大系図』に、

「建武三年十月春宮、北国に行啓す、貞胤これに供奉し越前木目峠に於いて雪道に迷い、足利高経の陣に至る。既にして自殺せんと欲す、高経礼詞を尽くし、枉げて武家に属せと、其の語丁寧たり矣、貞胤諸卒の命を助けんと為し、以て尊氏の麾下に庇す、爾

来軍功に励む、遂に武功を賞し従四位下に叙さる」云々

(註) 春宮は恒良親王。木ノ目峠は福井県にあり、いま日本最長の北陸トンネルがこの下を貫通している。

とあって、足利氏に降ったことが判る。貞和四年(一三四八年)楠正行戦死の四條畷戦に、貞胤が高師直指揮の幕府軍に加わっていることは、これで説明がつく。

貞胤の従兄、胤貞は最初から尊氏方で、一族の相馬親胤といっしょに鎌倉に馳せ参じている。

同族、親子兄弟の骨肉間で、敵となり、あるいは味方となって戦場に相見るとの惨は、これより戦国へかけての時代、日常茶飯事であったのである。

これをもって、房総地方はほとんど尊氏の勢力下に入り、最も北朝色の濃厚な地帯となった。半世紀をこえる長い内乱の時代、どんなに東上総の農村は疲弊したことであろうか。社会不安は随処にみながぎって、庶民は難渋な生活と険悪な世相に、おののいていたことが想像される。

混乱した世相 建武中興を境とした前後の時代、中央京都がどんな様相を呈していたか、これを雄弁にものがたる落書が、『建武年間記』に採録されている。建武元年八月のころ、一条河原になに

びとも知れず、当時の社会を諷刺して落書したものである。
「此北都ニハヤル物、夜討強盗謀論旨、召人早馬虚騒動、生頭還俗自由出家、俄大名迷者、安堵恩賞虚軍、本領ハナルル訴訟人、文書入タル細葛、追従讒人禅律僧、下剋上する成出者、器用ノ

なに質実剛健であった関東武士が御簞籠に乗って役所に出動するのは情けない」といったところ、まことによく当時の世相をうがっている。

中央においてこのとおりであるから、地方の混乱のほども推して知るべきであろう。次に、東上総の農村の「資料を示して、その一端をうかがってみよう。

鎌倉覚園寺にのこされているもので、観応三年(一三三五年)、一宮の西方数里の旧小蓋・八板(もと東村小生田―現長南町)両村に出された尊氏の禁制状である。

たぶん制札として村の要所に建てられたものであるが、寺領であつてかくのごとくとすれば、まして一般農民の被害は想像以上であつたと思われる。文面は、左のとおりである(原文は漢文)。

禁制 覚園寺

右は当寺領上総国小蓋、八板両村に於いて、武士甲乙の輩、濫妨狼藉致すべからず、若し違犯の族有らば罪科に処す為め、交名を注申すべきの状くだんの如し

観応三年六月廿四日

文中の「武士甲乙」は、たぶん悪党を指すものであろう。荘民にして領主に従わず反抗するものを悪党と呼んだが、このころ悪党全国に発生し、社会不安をいやが上にもかきたてていた。

『吾妻鏡』の承元二年(一二〇八年)七月十五日の条に、

「泊江入道増西、五十余人の悪党を率いて寺領に乱入し、田を刈り狼藉に及ぶ」

堪否沙汰モナク、モルル人ナキ決断所(中略) マナ板烏帽子ユガメツツ、気色メキタル京侍、タソガレ時ニ成タレバ、ウカレテアリク色好、イクソバクソヤ数不知、内裏ヲガミト名付タル、人ノ妻軛ノウカレメハ、ヨソノミルメモ心地アシ(中略) 鉛作ノオホ刀、太刀ヨリ大ニコシラヘテ、前サガリニゾ指ホラス(中略) 日銭ノ質ノ古具足、関東武士ノカゴ出仕(下略)」

これを現代文になおせば、「このころの京都名物は夜討・強盗・偽勅書、捕われ人・急使を乗せた馬・ありもしないことから起ったからさわぎ、坊主頭がすぐ俗人にかえるかと思えば俗人がたちまち坊主になる、あくどいやりかたでノシ上った荘園大名の喰わせ者、所領を保証してもらい恩賞にあずかるためのインチキ戦、そうかと思えば領地をとられて訴訟に上京した男が書類を入れた細つづらを背負って行く、おべっかするもの・人をおとしいれる男・禅宗や律宗の坊主が目につく、長上をたおす成りあがり者の多いこと、政府ともあろうものが有能も無能もおかまいなしに、誰でも訴訟決断所の役人に任用されるだらしなさだ(おそらく袖ノ下採用)。狙えぼしを横つちよにかぶり、いやに気どった京さむらいが、夕暮れどきともなれば、うかれ歩いて女あさりをする、それが何程あるか数えきれない、また宮中拝観にことよせて、ちゃんとした人の細君たちがうろついているのは、はたの見る目もにがしいかぎりである。いっぽうには形ばかり大きいなまくら刀、太刀より大きめに作って、前さがりにぐつと下げて強そうに掴んだ武士。なんとまあここには毎日払いの質で借りた古い武器を身につけてる者がある、またあん

と、武蔵国威光寺の被害を伝えている。荘の小役人が荘民中のボスが、徒党を組んで荒しまわったのであろう。これは鎌倉も早いころのこと、南北朝の内乱時代は全国的にこの風潮が激化した。一宮地方も、この難に苦しめられていたことが、前記史料によってよく窺い知られる。

また、この時代の兵乱から戦闘の規模がだんだん大きくなり、大兵力を動員しなければ勝利はむずかしくなった。したがって、在来の野武士(野伏)や溢者のような無宿浪人をかきあつめるくらいでは追いつかず、農民層から屈強な若者を募って、いざというときのために常備する必要にせまられたのである。歩兵ともいうべき足軽や輪卒にあたる仲間・小者は、かくして彼らの軍組織にひろく一般農民から取り入れられた。

一面また大兵団を擁するようになったことが、兵糧米や軍用資材の消費や流通を拡大せしめて、商業の隆昌を促進した事実も見のがせない。

そして、商人の活躍と商業資本の蓄積が、社会の構造を大きく変えて、次の時代へ移行するのである。

(附記) 鎌倉明玉院文書に、文和三年(一三三四年)十一月二十四日、前安芸守、地頭代助法印御房宛の問状があり、それに「五大堂、春日社雜掌慶退申、上総国金田郷内万石大崎村正税事(以下略)」と見える。『千葉県誌』その他に、これを一宮の金田としているのは誤りであつて、君津郡旧金田村に万石も大崎村(今亡)もある。